

文久四年一月廿七日より文久四年一月廿九日まで

P8311077 right

旅館見贈墨陀所、買之桜餅(\*1)一籠因得一絶、桜糕香味満堂堆、三子可称九春魁、□得墨陀風致  
忝、転輸千住駅頭来、桜葉餅餅味最珍、牙頭咬喫(得)転清新、官身豈料(あにはか\*2)、千珠(住)駅、  
喫取墨坵填(畔)春

廿八日午陰朝晴

朝第六字時十ミニユート過出立、馬生村にて野立(\*3)、第八字時栗橋小休所に着、去る午年七ヶ  
年前同宿

通行せし時の利根川出水、翌年にて田畑等水亡夥かりしに、荒蕪(\*4)の地は悉く開墾行届き  
人烟(\*5)も少数増加せし如くに思はるに此の苦力可察、栗橋御閑所足立保(兵衛)、加藤李兵衛  
名刺を出せり、渡船場には領主船手奉行、船を艀て出迎へり、船には上の間、並次の間  
(用給を入る)を仕切り

八挺櫓にて、□の幕船印を用ふ、此方は川印で□を建てり○南岸梅花、北岸柳、利

P8311077 left

根渡戸醉春風、僕夫休促艀舟緩武■風光一望中 (渡頭口□)

茶屋新田(中田、古河、両宿の間也)にて一葉松の老幹を見、一葉を拾ひ帰ったり、古河宿  
に至れば領主足輕

(古河休)兩人先導し町奉行出迎えり、第十時過午休所(古河に)着す、領主より使者差越(友沼  
出立間田小休)第三時十五ミニユート過古

(小山泊)河宿着、同宿には戸田越前守家来出迎へり、太左衛門尋問す面せり、灸治を試む  
廿九日未 晴 同朝三十八(撰氏三)度 昼五十(撰氏十)度

朝第六字時午前出立、芋から新田野立、小金井宿を過ぐ、同宿領主堀田鴻之丞家来出迎  
(石橋休)宿内足輕兩人先導す、第十字時午休所石橋宿に着、雀宮小休基新田野立、第二字時頃  
(宇都宮泊)宇都宮宿の内、十(千)手町へ入領主戸田越前守町奉行初め外三人、所々に出迎へ  
足輕兩人先導す、同時

過旅宿へ着、右町奉行尋問に来る○山溪に残雪白漫々安坐輿中不識寥

□是太平餘澤賜推窓遥拝二荒山(ふたらさん)

\*1: 餅(いっ)、粉餅や蒸餅のこと、現在の桜餅。 \*2: 豈料(あにはか)らん、思いがけなく

\*3: 野立(のだて)、野外での休憩

\*4: 荒蕪(こうぶ)、土地が荒れている様子)

\*5: 人烟(じんえん)、人家から立ち上る煙

( )内は細字双行(一行に小さい文字で二行書き)などの場合です。

□印は解読未了の文字です。私の実力ではすぐ解読できません。

【判読不可】、■は、文章の一部に汚れ、虫食いにより文字が無い等です。